

Weekly Michael's News

<今週の聖句>

2016年7月11日発行 No.8

「全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。歓声をあげ、喜び歌い、ほめ歌え。琴に合わせてほめ歌え 琴に合わせて、楽の音に合わせて。ラッパを吹き、角笛を響かせて 王なる主の御前に喜びの叫びをあげよ。」
(詩編 第98編 4～6節)

<学生講話シリーズ第3弾!! リハ学部のお話でチャペルが震えた!?!>

先週火曜日は、最近話題の学生講話シリーズ第3弾という事で、リハビリテーション学部2年生の藤波 心さんが礼拝の中でお話を担当して下さいました!! 聖歌隊や同じ学部の友人、先生方(理事長や学長の姿も!!汗)も多くチャペルに足を運んで下さる中、藤波さんは自分の中にあった大切な力である「歌」にKIU入学を通して出会い直した事、またそれを通して自分をリフレッシュし、また新しく歩み出せている事から、「歌う事が神様からのプレゼント」であることを力強く証して下さいました!!

学生の講話は今年度から始まりましたが、また違った響きを持って出席者の心に届くように感じます。7月14日(木)も、経済学部3年生の八代 祈さんが講話をして下さいます!! 「七夕祭」という大きなプロジェクトをやり遂げる時に、最も必要となったものは何か…? 自らの貴重な経験を通して見出した真理を、ぜひ聴きに来てください!! Don't miss it!!



多くの友人も駆け付けたチャペル

「歌こそ神様からの贈り物です!!」

超緊張したけど、楽しかった!!

<時代を超えて語り継がれる力の源!! そんな真理の言葉が満ち溢れるKIUを目指して…>

キリスト教センターでは、今週から学内で新しい取り組みを始めています。名付けて「KIUのキャンパス内に聖書の言葉を掲げよう!!」キャンペーンです。「そのままやないかい!!」というツッコミが聞こえてきそうですが、1～3号館、アクアホールや食堂にも毎週一言、有名な聖書の言葉を、短い解説付きで掲示します。「聖書の言葉に出会って、人生のスイッチが入った」と言う人は少なくありません。時代や国、文化を超えて、世界中の人々に力を与えて来た聖書の言葉に触れるチャンスをぜひ自分の力にして欲しいと思います!!



真理の言葉が人生を変える!!…かも?

<先週のメッセージ> ※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています

7月4日(月) 野間 光顕(チャプレン) テーマ:「言(ことば)の中の命」

通勤で乗っていた六甲ライナーの中、テスト前らしき高校生のボヤキが聞こえてきた。「ああ、もう覚えられない!!」「マジテストってだるい」「あの先生の勝ち誇った顔、めっちゃうざいな」「テストなんか、この世から消えてなくなれ…」その生徒が言い放った現実逃避の言葉に凄味を感じた私は、ゾットするのと同時に、日頃からコミュニケーションの道具として言葉をどのように使っているかを内省させられた。今日の聖書、ヨハネ福音書の冒頭には、言葉の中に神がおり、そこに命があると記されている。言葉と命を大切にしながら、新しい月も歩みを進めていきたい。

7月5日(火) 石原 正彦(キリスト教センター主務) テーマ:「私たちに与えられた役割」

私は、1980年代に就職活動を経験した。高度経済成長の真っ只中で「企業戦士」「大量生産・大量消費」などの言葉が流行していたが、大量のゴミや公害、何より人を歯車のように使い捨てる感覚に強い違和感を覚えた。そんな中、キリスト教を土台とするYMCAに就職し、その理念である「皆が一つになるために」という言葉に出会って真理を感じた。私たちは、それぞれ個性が異なるのと同じように、神から備えられた役割がある。価値観多様化の時代、前のような経済成長が見込めない今、人の為に生きる事が見直されている。互いに協力し合いながら生きたい。

7月6日(水) 藤波 心(リハビリテーション学部) テーマ:「歌の力、私の活力源」

私は、足の病気を患っている母を支えたいという思いからKIUに入学したが、学習の大変さに時々気分が沈む事があった。そんな時、近藤先生から聖歌隊を勧められ、大好きな歌を学習の合間に歌う事で、気持ちをリフレッシュ出来るようになった。聖歌隊の仲間を集め、練習を重ね、一体感が生まれる中で経験したクリスマス礼拝。歌を通して日頃の疲れや悩みが流れ出て、改めて歌の力の大きさを感じた。歌と学習の両立は当然大変だが、これを通して医療従事者として必要な心の余裕を意識できると思う。私にとって「歌」は心を再生する大切な力だ。人それぞれにリフレッシュ方法は違うと思うが、これこそ神様が皆に与えた「贈り物」ではないだろうか。

7月7日(木) 宮本 重範(リハビリテーション学部) テーマ:「傾聴について」

医療の現場は日々変化しており、また様々な対応が求められる。そこで大切になってくるのが相手の言葉を心込めて聴く「傾聴」だ。傾聴には3つの要素がある。1つは「相手の話をありのまま受け止める」こと。2つ目は「共感」であるが、これは「するものではなく至るもの」という言葉があるように、相手を分かりたいと思う所から始まる。3つ目が「関心」、すなわち相手に関わろうとする姿勢だ。病の現場では、話を聴くだけで癒しが生まれる。これは、傾聴が相手の存在を根底から肯定する事に繋がるからだ。耳、目、心を傾けて聴く事を大切にしたい。

7月8日(金) 中原 康貴(チャプレン) テーマ:「どちらが正しいのか？」

こんな物語がある。ある老人が頭に赤と白に分かれた帽子を被って畑を横切った。畑では農夫たちが仲良く働いていた。しかしその農夫たちは帰道、畑を横切った老人が被っていた帽子の色で「赤だった」「白だった」「自分たちは間違っていない」と争うようになってしまったという物語である。英国聖公会の大主教がこう言っている。「和解は必ずしも同意を意味しない。実のところ、そんなことは滅多にない。今、私たちに求められている和解はうまく不同意する方法を見つけることだ。」無理に他人に合わせる必要はない。しかし、自分とは違う意見を持つ人を尊重し、その人と共に歩むことが大切である。
(文責:野間光顕)